

佐佐木信綱の中国漫遊

一、はじめに

佐佐木信綱は明治五年生まれ、幼少時から歌人の父佐々木弘綱に英才教育を施された。明治二十一年、父の志を継いで和歌の実作と研究を生涯の目標とし、若年早くも名をなすに至った。十九歳の時、父とともに『日本歌学全書』の刊行に従い、十二冊の刊行を終えたのが二十四歳であった。後、万葉集の研究や、西行の『聞書集』と実朝の定家所伝の『金塊集』の発見で名を馳せる。一方、佐佐木信綱は歌人としての活動も極めて顕著なものである。明治二十九年十月、歌誌『いささ川』を創刊した。翌年、落合直文、与謝野鉄幹、正岡子規などと新詩会を起した。更に父の雅号竹柏園にちなむ竹柏会を主宰するにあたり、「ひろく、ふかく、おのがじしに」の標語を掲げ、『心の花』を創刊したことによって、短歌革新運動に大きく寄与した。^二佐佐

鄒 双双

木信綱は川田順を始め、木下利玄、斉藤劉など個性の伸張した多数の門下を育成しながら、生涯にわたって活躍した。『おもひ草』（明治三十六年十月三十日、博文館）『新月』（大正元年十二月、博文館）、『常磐木』（大正十二年一月刊、竹柏会）など十二歌集を書き残した。このように、佐佐木信綱は万葉学者、国文学者でありながら、名高い歌人でもあった。佐佐木信綱は明治、大正、昭和を生き抜き、九十一歳で世を終えた。九十一年間の生涯で、唯一の海外旅行は中国漫遊であった。^三

佐佐木信綱の中国漫遊については、既に中村義の「長沙開港前後と日本人——竜藏、信綱、梅暁、公望」^四と石崎等の「大陸のイメージ——竹添井井から佐々木信綱へ」^五に言及されている。中村義は「彼の『南清風景談』『遊清吟藻』『ある老歌人の思い出』『作家八十二年』に掲載する数々の歌、旅先の思い出、交友などを通じて、日中文化交流史の一駒を紹介し」^六と歴史的な

視点から考察されたが、文学的な視点からの分析はしていない。石崎等は「聴覚よりも視覚を通して『船牽き』労働者や『乞食』や老人、童子と対等に向き合い、その存在を確実にとらえようとしているのである。そうした率直な他者認識を評価すべきであらう」と結論付けたが、それに対する具体的な分析はしていない。本稿では、佐佐木信綱の中国漫遊活動の全容を徹底的に明らかにし、その活動を描いた歌集『遊清吟藻』を分析していきたいと思う。

二、中国漫遊の契機

明治三十六年の夏、「上海の白岩龍平、艶子夫人が上京される際、湖南にゆく湘江丸の初航行にと切に誘われた」^八。これは佐佐木信綱が中国に赴くきっかけであった。この文中の白岩龍平（一八七〇〜一九四二）は荒尾精に従い、一八九〇年上海に渡り、日清貿易研究所にはいった。後、一八九六年日中合弁の汽船会社大東新利洋行を創建し、翌年上海蘇州間の航運業を開始した。一九〇一年、湖南省洞庭湖の航路開拓に着手し、何度か湖南航路を視察した。一九〇二年五月政府保護の下に、株式組織湖南汽船会社を成立した。晩年東亜同文会理事長に就任し、

日中関係の経済、文化、教育など広い分野で活動した。湖南汽船、大東汽船、大阪商船及び日本郵船がひとつになり、日清汽船会社が成立された。彼の妻である白岩艶子は佐佐木信綱の門人で、『心の花』の同人である。歌集『白楊』『芙蓉』などがある。佐佐木信綱は小さい頃からかなりの航海恐怖心を持っていた。佐佐木信綱自身が記した「年譜」（『佐佐木信綱全集第八巻』（昭和三十一年一月十五日、竹柏会）に収録される）によると、明治十二年七歳の時、父と三河西尾を訪問しようと、神社湊より乗船し、暴風雨に遭遇し、辛うじて某島に着き、漁師の家に泊まったという。それ以来、航海を恐れるようになった。自伝の『ある老歌人の思ひ出』には次のように記している。

旅行を楽しむ自分であるが、足跡はきわめて狭く（中略）海の彼方にとては、南清に遊んだのみ。朝鮮には近親がをつたので遊びにゆかうとしたことがあり、台湾には後藤新平伯の民政長官時代に招かれ、萩崎正君が総督の教育課長であった頃夏期講習会に來られたならば所々を案内しようといひおこされ、下村海南博士の民政長官のときも招かれた。欧米に遊ぶ機会にも二度恵まれ、青島にいつてはと勧められましたが（中略）自分の性格に、弱弱しい卑怯なところがある故かと痛歎された。^十

佐佐木信綱は海外へ行く機会に何度も恵まれたが、幼時時代の記憶に縛られて実現できなかった。なぜ白岩夫婦の「好意を喜んで、晩秋に出で立つこととなった」のか。それは「漢文学の和歌に及ぼした影響は万葉に現れている、古今以後には愈著しい、その漢文学を生んだ南清の風光を接したい」という強い思いがあつたからである。

三、中国渡航の準備と処女歌集『おもひ草』

中国に渡航すると決めた佐佐木信綱は早速その準備に取り掛かり、「あちらの文人に贈るべく、いそいで歌集の編纂を企て^{十二}」た。それは明治三十六年十月三十日、博文館による彼の処女歌集『おもひ草』の刊行である。『おもひ草』の構成は次の如くである。巻頭には依田学海に漢文の「思草序」を、森鷗外に日本語の「おもひ艸の序」を、野口寧齋に「佐佐木君歌集題詞」を請つた。巻末に「いまきの書たづさへて一人わが行く唐土の秋（將遊清国）」をおいた。なお、依田学海の「序文」は一〜三頁を占め、森鷗外の「序文」は五〜十二頁に及んだ。野口寧齋の「題詞」は十三頁に置かれた。そして佐佐木信綱は最後の頁に「余欲遊清國因輯平素所賦先為一集事出倉卒駁雜頗甚

他日將續出二集三集乞教大方」を附した。

『おもひ草』は後多少改訂されて、大正八年五月に博文館から刊行された。この改訂版の「自序」に、佐佐木信綱は『おもひ草』当時の自作に対する態度を次のように述べた。

歌に重んずべきは想である。想は廣くまた深くせねばならぬ。殊に歌は単に自分の即興即感のみを詠むだけのものではない。諸々の人諸々の境遇に同情し、同感し、人間の感情を歌はねばならぬ……

依田学海は佐佐木信綱と父代からの交際でありつつ、近隣同士でもあつた。依田学海の「序文」に関しては、「この序文はなかなかの高説、示唆さるる多くを含む好文章である」と評価された。^{十三}「序文」の一部は次の如くである。

當是時。歌道大衰。拘泥格調。不能脫古人範圍。陳腐自珍。君別創一派。不拘舊格。着義斬新。凡人間所有萬物莫不入歌詠焉。（中略）可謂不失前人之遺業。以固後世之基礎也。聞君先子好遊。君幼從之。漫遊四方。山川草木鳥獸。古賢遺跡。受其指導。及後移東京。暇則出遊。

依田学海は「創業與守成何難。余以爲創業似難實易。守成似易實難何也。（中略）凡文藝伎術莫不皆然矣。」と「業を成す」より「業を守る」方が困難だと記した。そして佐佐木信綱が今

までの和歌の道にはない新たな歌の流派を創設しようとし、前人の遺業を失うことなく、後人にも基礎を構築したことを絶賛したのである。更に、佐佐木信綱が父からの影響で旅行好きになつたことも記している。

森鷗外は「序文」に「我が國は西の國國と殊にて遠き昔より詩と社會との連繫とはに絶ゆることなかりき。」と中国及び日本^のの因縁を回顧し、社會變遷、文明消長と共に形式が移り変わった中国詩歌に反して、「かの三十一言の形式に今むかし相異なる詩のこころををさめ入れて擬ぐることなきはたなどかこれに殊なるべき」と短歌の不朽の素晴らしさを述べた。そして、佐佐木信綱の『おもひ草』を「詩のこころに従ふ表現の數おほくして、これに應ふる形式の弾力性大いなること、世に詩集はさばにあれども、これに上こすものまた有りぬべしやは。」と高く評価した。

野口寧野の題詞は十二回にわたつて改められ、非常に興味深い。次に全文引用をする。

佐佐木君歌集題詞

讀万卷書行萬里養胸中氣而已矣

巍其如山浩如水雅音洋洋合宮徵

感動神鬼參經史君歌豈音彫蟲技

三十一言千萬旨惟情一字為本始

山高月小過黃州黃鶴縹緲餘飛樓

三閩祠荒天易秋森森洞庭湖上舟

八九雲夢吞不休時一卷驚同儕

畫到有声清更適臥我讀之猶伴遊君將遊清國

「黃州」「黃鶴」「洞庭湖」など地名はいずれも長江沿岸に位置しており、佐佐木信綱の乗る予定の湘江丸は、上海から長沙まで必ず通るところである。この題詩では沿岸の風景を褒めたたえている。四行目の「畫到有声清更猶」の一文が一層佐佐木信綱の中国に対する思慕心を高めたのであろう。佐佐木信綱は『おもひ草』を携えて神戸から亜米利加メールの信濃丸に乗つて、上海に直航した。船が五島を過ぎたところ、「今既に我國をばなれたかとおもひますと、人なき甲板の上、折々ほの白く見ゆる浪に何か語るが如く星の光のまたたきをる大海の上、何ともいふにいはいれぬ一種の感が胸のうちに満ち、我胸をさすが如く思はれて、夜更くるまで甲板の上にたたずむでおりました」と^{十四}感無量の気持ちを表している。

初めて祖国を去る佐佐木信綱は多少の不安を感じながらも、大きな期待を胸に抱いて中国へ向かった。

明治三十六年十月十八日に佐佐木信綱は上海に到着し、白岩

四、『遊清吟藻』

龍平から迎えによこされた井上良平の案内で、兆豊路にある白岩龍平宅に向かった。それから上海を一覧して「長崎から来べき湘江丸が遅れたので、大同汽船会社の汽船で揚子江を遡ることになった。白岩君と大阪商船の上海支店長堀啓次郎君と自分の通訳の為に随行される井上良平君と、大阪商船の雇員の支那人との五人」で上海を離れて、内陸へ立った。佐佐木信綱が進んだルートは次の通りである。

南清の主なる部分で十八省の内、江蘇、安徽、江西、湖南、湖北、浙江の六省を経、省の門戸をうかがいました。併し二箇月半の短旅行ゆえ、十分な観察はできませんぬが、遍歴した順序によって、まづ上海、次に蕪湖、九江——潯陽湖、漢口等、揚子江沿岸の上水。湖南に入りましては、岳州府——岳陽樓、洞庭湖、汨羅、湘陰、長沙、昭山、湘潭。さて新堤まで引かへし、沙市、荊洲城、宜昌より、三峽の下峽荷廻り、漢口まで帰り、下り水には南京、鎮江。長江を横ぎり大運河に入りて揚州。上海に帰りまして、蘇州府、杭州府と見めぐった。

佐佐木信綱は明治三十六年十月十八日から明治三十七年一月末にかけて中国を漫遊した。次章では中国訪問中に作成した歌集『遊清吟藻』について論じて行きたいと思う。

佐佐木信綱は二十四歳の時、「亜細亜の地図色いかならむ百年の後をし思へば肌いよだつ」と述べ、若い時からアジアへの関心を持っていた。佐佐木信綱は一体いかなる中国を目にしたのか。そして彼はどのように中国を受け止めたのか。佐佐木信綱は帰国後『遊清吟藻』、そして談話記録「南清漫遊談」（『心の花』明治三十七年四月一日発行の第一号、五月一日発行の第二号、六月一日発行の第三号、七月一日発行の第四号）と「南清の演劇」（『心の花』明治三十七年六月一日、第三号）などを表している。この旅を記録したこれらの作品に着眼し、考察していきたいと思う。

『遊清吟藻』は佐佐木信綱が中国を漫遊しながら作った歌であり、全部で二百十六首ある。一部は『心の花』（明治三十七年第一、四、五、七号）に発表された。この歌集は未刊で、一九三〇年二月改造社より発行した『現代短歌全集 佐佐木信綱集』に収録され、後の『佐佐木信綱文集』（竹柏会、昭和三十一年一月十五日、竹柏会）にも収録された。佐佐木信綱は中国での活動や観光した有名地、目撃した中国風俗、中国人の日常を作品に取り上げ、非常にリアリティに歌に反映し

た。作品の評価を概観してみる。歌人の窪田空穂は「内容も高くない」と評したが、依田学海は「遊清吟藻序」に「聘瑰異絶特之才。賦雄鹿俊邁之歌。山川之英靈。以榮其氣槩。賢豪之偉跡。以發其胸意。造語清新構思奇警屢見累出。使讀者有萬里長風之想。吾友君遊清吟藻。可以當此評矣」^{二十}と記し『遊清吟藻』の造語が清新で、発想が奇警であると評価した。ここでは作品そのものの優劣を論ずることを避けて、詠われた対象に着目していきたいと思う。

『遊清吟藻』収録の歌は、佐佐木信綱が遊行した地域で分けると、次の如くに分類される。湖南省七十二首、江蘇省五十首、湖北省四十首、上海二十一種、浙江省十首、四川省六首。最も筆を振ったところは湖南省である。湖南省は案内役白岩龍平の活動中心地であるため、恐らく湖南に滞在する時間は最も長かったと思われる。次に多く描いたのは江蘇省であった。江蘇省の南京は北部に長安、洛陽、北京の重要国都があったのに反して、中国南部における唯一の国都であった。通計三百七十年余りの国都の歴史を持つため、数多くの歴史旧跡文物を残した。江蘇省は佐佐木信綱を魅了させ、いろいろ考えさせたのではないか。

また短歌の描写対象の特徴で分類すると、概ね次のようにな

る。

- a、名所旧跡を描く歌 六十四首
- b、自然風景を描く歌 五十二首
- c、庶民生活を描く歌 三十九首
- d、人物交流を描く歌 三十二首

その他、雑感を抒情する歌もある。

右記 a、b、c、d 四種類の歌をより詳しく考察していきたいと思う。

a、名所旧跡を描く歌

佐佐木信綱は、上海で愚園^{二十一}を見てから、金玉均遭難^{二十二}の跡を訪れて

流れたるは尊き血なり流れたる血しほ花とし咲く春あらむと金玉均の遭難に対して、佐佐木信綱は大いなる意義があると歌で主張した。そして徐家滙を通つてから龍華寺で

塔のもとに秋の雲仰ぐ龍華を紅みにそむる桃の時季にあは

という歌を残した。それから、長江に沿って、奥へ進み、漢口に入り、伯牙臺を訪問した後、岳州にて岳陽楼に登り、洞庭湖を鳥瞰した。長沙の岳麓書院で

江南の子弟八千今いづら滔々として江の水流る

という歌を記した。湖北省の荊州で鼓樓を仰ぎ、宜昌で三遊洞を尋ねて

わが前に楓の葉ちりく白居易が遊びけむ日もかくや散りこし

と詠み、白居易のことを偲んだ。更に、上海へ戻る途中の南京で、

鼓樓たかし道をさしはさむ楊柳の落葉細葉に照りしむ夕日

大路ひろく鼓樓そそり立てり六朝の古都に今し入ると心はずむも

と鼓樓を見物し歌を詠んだのである。「わが國の新聞を見ざること三十餘日なりき」^{二十三}佐佐木信綱は、南京師範學堂に菊池謙

次郎を訪ねる際に、落合直文の訃報を聞かされた。佐佐木信綱は十六歳の時から、古典科の先輩落合直文と付き合い始め、「爾

來多年、道の上の先輩として尊敬もし、また親しく交はつてもをつた」^{二十四}先輩の永眠を、所は、故京建業、時は歳まさに暮れ

なむとする前二日、窓から見える雲の色も寒い夕べに聞いたのである。自分の胸は、旅愁を超えた深い悲しみにいたんだこと

であった。」^{二十五}こうした悲しみを歌

冬の日ざしつめたき古都のたそがれに君世になしときべき

ものか

に託し、更に、

年暮れてこがらしさむき金陵に悲しきたよりきくにえ堪へぬ
うれひたほき舊き都の旅の床に身にえみわたる雁のひと聲
京を出てむとする前二日君に書を送りて歸京の後禹城羈旅
の物語すべく記したりしを悲しき哉

二十年のまじはり厚き君あらず唐ものがたり誰にかたらむ^{二十六}
と追悼文を記した。落合直文の逝去は間違ひなく佐佐木信綱の
遊行気分に影響を及ぼした。その後、孝陵で

天くらく枯野草原茫漠たり石人石馬何をか語らふ

英雄の事業はた何ぞくづれたる城門の壁にこほろぎ鳴くも
莫愁湖を見て

莫愁湖日のいろさむし水樓の朽ちたる欄にちかき敗荷
美人あらず英雄あらず楊枯れみづうみの水たえだえにある

と詠んだ歌は若干寂寥感を帯びている。落合直文が亡くなる悲
しみは『遊清吟藻』に数多くみられる。しかし、佐佐木信綱の

歌はこのような悲しみから脱却し、兩華台にて

草木おひず小石つめたき丘の上に古き都の秋の雲見る
見下ろせば金陵百里風さむし誰またここに都建つべき

戈とりて起たむは誰ぞ江上の雲紫に王氣たなびく

と衰えた南京の復活に期待を寄せた歌風に変化していく。それ

はなぜか。佐佐木信綱が遊行にて作った、明治三十八年三月『帝國文学』に掲げた「慨世吟」に触れなければならない。

「慨世吟」は、佐佐木信綱が、南京で「憂国の青年、亡命の志士、多情の詞人、偶然萬里の異域に邂逅す」^{二十七}ことを描いた作品である。ストーリーを簡単に説明してみる。

憂国の青年張生は日本から帰国したばかりである。故郷の湖南に帰るついでに、南京を遊覧するところ、フイリピンの独立軍に属した日子と出会った。日子は独立革命の失敗で四方に亡命する羽目になった。かつて東京にある佐佐木信綱の家の近くに住んでいた。佐佐木信綱もこの日子の苦衷を聞いたという。相携えて雨花臺に上ってきた張生と日子はそこを訪ねる佐佐木信綱と偶然邂逅したのである。

佐佐木信綱は二人の胸中を聞いて、詩情を禁じえず、十六首の歌を詠んだ。先にあげた兩華台で作成した歌三首を『遊清吟藻』に入れたのである。そして兩華台で作成し、「慨世吟」に収載されているその他の数首を左にあげる。

故郷は雲井の遠の三千里三千里外友と相見る

世を嘆き世を憤る夜の窓燈火くらし酒はつめたし

くみかはす老酒菊花酒友も酔はず我又酔はず世をし嘆きて

秦淮の流つめたきさ夜風に誰が乗る驢馬ぞ亡国の聲

歌人われ我れに筆あり我が筆を劍にかへむ我が國の爲^{二十八}を前向きにしたのであろう。

思い、落合直文の死の悲しみから脱却し、気持ち心を打たれて、作家として自分なりの役割を果そうと佐佐木信綱は兩華台で日子と張生に出会い、二人の革命活動にこうした転換は「慨世吟」に記述した二人の志士と関連があると考えられる。

その後、揚州で

いにしへの風流の帝宮姫の遊べるを見けむ蹟はいづらはと感嘆し、金山寺、甘露寺に行き、上海に着いた。またすぐ蘇州、杭州に至った。西湖で

西湖の水手にむすびつつ夙く逝きし中野逍遙を思ふ切なりと友人の中野逍遙を偲んで歌った。^{二十九}佐佐木信綱は昔の白居易や英雄など古人から身近の故人らに対する思いを、これら旧跡を歌うことによって表しているのである。

b、自然風景を描く歌

自然風景の類に入った歌はほとんど船で移動中に目撃した沿岸、または江上風景に対する写真である。特に湖南省洞庭湖の描写は著しく多く、十一首である。

をさなくて浩浩蕩々と書に讀みし洞庭の湖を正目に今見つ

月のぼれり千里洞庭の一隅を過らむとする船の進み返し

夜空たかく天つ白雲たなびけりわれら月下の仙たらむかも

ここの「書に読み」というのは、どんな書を指すのであろうか。恐らく岳陽楼に刻まれた范仲淹の「岳陽楼記」^{三十}のことを指している

と推察できる。「岳陽楼記」の中で「皓月千里、浮光

躍金」^{三十一}がある。佐佐木信綱の「月のぼれり千里洞庭」は范仲淹

の句が元になっているのではないか。この洞庭湖は佐佐木信綱に興味深く映ったようである。短歌だけでなく、「洞庭湖」という随筆も表している。随筆では

この天地の大観にひたつて、人をも吾をも全く忘れていた

(中略) 夜はふけ。月はいよいよ澄む。『此意無人識』とい

ふ句のごとく、何ともいひがたい感が胸にみちて、我が身

そぞろに我あるを知らず、この隈なき月と果たしなき湖と

に對うてをつた。^{三十二}

洞庭湖の壯觀に愕然とし、無我心境になった佐佐木信綱は野口

寧齋からもらった『おもひ草』の「序文」漢詩の「森森洞庭湖

上舟」一句と重なる情景を感じ取ったのであろう。

c、庶民生活を描く歌

『遊清吟藻』に庶民生活描写の短歌が多いのも特徴の一つと

して挙げられる。佐佐木信綱が遊行を開始する場所は上海であつた。上海は一八四二年の南京条約により四三年に開港した。

徐々に外国貿易商の集まる中国最大の貿易港町になった。この

繁栄ぶりは言うまでもない。佐佐木信綱は「まづ驚かるるは揚

子江口の廣さ」、「上海に近づくまに、兩岸には目を驚かす洋

風の建物立ちつづき、数千噸の商船軍艦縦横に往来し」と語つ

た。^{三十三}ところが、佐佐木信綱が上海についてなにより先ず歌いだ

したのは繁栄様子ではなく、「苦力」のことであつた。^{三十四}

第一步を古唐の土に印すとふ心みだりて群れ寄る苦力

この歌は『遊清吟藻』の巻頭の歌であつた。

「苦力」は当時中国における下層労働者のことを指す言葉と

して使われていた。佐佐木信綱は「苦力」に対してどのような

思いを抱いていたか。石崎等は「第一步」の歌には「苦力」

に対する嫌悪感など皆無である。むしろ憧れの「古唐の土」を

踏んだ感動によつて均衡が保たれている。^{三十五}と論じた。しかし、

むしろ「詩歌文章は人心の深奥の声なり。理想にあこがれ、現

実に満足せざる人の心が、現実にくれて発するまことの調な

り」と唱えた佐佐木信綱は、目にしたものに感銘し、その心情

を率直に歌に表現したのではないか。それはこの一句だけでな

く、「苦力」以外にも、佐佐木信綱がこのような下層労働者の

生活様子を多く描いたことから分かる。これらの歌から佐佐木信綱の彼らに対する慈愛心が伺われる。旅程はほとんどが水路のため、船にかかわる人々の描写が多数あった。以下に庶民生活を描写する三十九首のうち特徴的なくつかを挙げてみる。

聲高に呪文となへて老板は大江の神に酒たてまつる (城陵磯)

船とまれば岸にわたすと小舟よせ聲々によぶ丹の頬の女 (岳州)

また、湘江にて

辮髪に白きが多き老板のうしろ手さむう水にうつれり

夜泣する老板の児が泣きやめば船の底うつ岸波のおと

夜泊せるわが船に近う泊りし舟舟子らあがり買標子にゆく

けはひ

燭の火はまたたきやまず友が語る牡丹姐のあはれなる戀

燈影まれにくらき江村の船がかり俚話ならむうたふ聲ちか

き

鴉片いまだよくは覚めざる船僕来て晩食といふなり今日も

暮るるか

更に、

壁たてる崖の磬路を竹綱もち船牽きのぼす人猿のごとし

(峡口)

岩かどのあやふきに立ち手網持ちて魚すくふ老翁よむしろ
幸あり (峡口)

きりぎしに茶館ならべり江を下りきり心やすらに博うつ船
子 (平善壩)

右に列挙した短歌はいずれも長江沿岸にて捉えた下層労働者を描いている。「船牽き」する船子のみならず、「俚話ならむうたふ」船がかり、一休みの間に茶館で「心やすらに博うつ船子」、「買標子にゆく船子」、そして「鴉片いまだよくは覚めざる船僕」も見逃さなかった。この一連の歌には船子の惨い労働現場、素朴な娯楽仕方、そして放縦墮落な所も残らずに描きつくしている。更に、船の客に声をかける「丹の頬の女」、生活苦で仕方なく「売春婦」になった少女、夜泣きの子供の面倒を見ながら客の世話をする白髪の「老板」、足元がよろよろしても崖に魚をすくわなければならない老翁などは、佐佐木信綱の心を打つたのであろう。佐佐木信綱がこのように積極的に庶民生活シーンを捉えて創作するのは当時の下層労働者に対する愛着心を持っているからであると考えられる。また、佐佐木信綱は「新堤に白岩君に別れ通訳の井上良平君と上水の汽船と待つ」^{三七}時、幼児と親しむ歌を詠んだ。

辯子も未だみじかき幼子と手まねし語る船まついく時

額にぼつりと紅をつけたる児何やらむ吾にいひつつ笑める
水つける道を照らすと篝火とも大江の岸に送り来し児よ

青き衣丹の頬のおもわ岸に立ち船を見る児をまたいつか見
む

佐佐木信綱は身振り手まねをしながら一生懸命子供とコミュニケーションをとりながら一生懸命子供とコミュニケーションをとろうとした。そして「またいつか見む」と名残惜しく思った。これだけではなく、佐佐木信綱は庶民と一緒に元日を迎え、次の句を記した。

老いたる躉船々長手とりいふおもしろき除夜ぞ飲み明すべし
新年おめでたうと支那小僕が年の壽詞の聞のよろしさ

いつも身近に船子がいるからこそ、佐佐木信綱はかれらの生活ぶりから目を逸らすことができない。親しみながら創作の源として歌に反映したのである。

d、人物交流

佐佐木信綱は遊行中、様々な人々と接した。上海に着くや否や、根津同文書院院長^{三十八}の訪問を受けて、「院長が諄々として語りつく東方経営策に耳傾け聴く」(『遊清吟藻』)という歌を詠み、同文書院にて「東亜のためよき人ここだここに生れつ東亜のた

め更によき人生れよ」(『遊清吟藻』)という歌を記した。蒙古王の家庭教師としてゆかれる河原操子さんが領事館にをられるのを訪うて、歌を贈った。この歌は「をみなにして遠く蒙古に入るといふひとの言葉のしづかに力あり」(『遊清吟藻』)であった。

また、漢口へ向かう船中、ポーランドの志士シエロシエフスキ君と船長の通訳にて談り、「愛国の情熱たぎる君の言葉忘れがたきこの半夜なり」を残した。異国の地で活躍しながら、何かを東亜や母国にもたらそうとしている人物の姿に、佐佐木信綱は感動した。その他、中国文人たちとの触れ合いは特に注目すべきである。中国文人たちとの交際については章を改めて次章詳細に考察する。

五、中国文人との触れ合い

佐佐木信綱は湖南に入り、白岩龍平の斡旋で、当時の湖南巡府趙爾巽、郷紳葉德輝^{三十九}を尋ねた。この二人は地元の有力量者で、且つ高い教養を持つ文化人でもある。前述したように、佐佐木信綱は中国文人に贈るために出発する直前に急いで『おもひ草』を編集刊行し、中国に携行してきた。その時、二人に友好のし

るしとして『おもひ草』を贈ったのであろう。佐佐木信綱は『ある老人の思ひ出』の中で趙爾巽を訪問し、招待される様子について次のように記している。

興を下りて趙爾巽巡抚の官邸に入ると、兵士に捧げた銃で迎えられた。それは自分の生涯の唯一度のことである。巡抚とは長い時間語りあい、シャンパンをぬくなど、種種もてなされた。民船に還ると使が来て、これから答礼にゆくとのこと。民船が狭いからと辞退すると、また使が来て、門を出て馬に乗られようとしてをられるとのこと、固辞すると、次の使が湖南通志を進物に持って来た。儀礼のやましかった時代である。翌朝また使が来て、詩を贈られた。^{四十}

佐佐木信綱は趙爾巽に盛大な儀式で迎えられて、大いに歓待されたことがわかる。そして趙爾巽は「答礼」として挨拶に行こうと意思を伝えたが、「民船が狭い」と断られた。それにもかかわらず、趙爾巽は佐佐木信綱に「湖南通志」の「進物」を贈呈し、「詩」を送った。この詩は『心の花』に掲載されている。

佐佐木君惠贈歌集敬歩首題詞原韻即請大吟壇指正

襄平 趙爾巽

初稿

莽莽神州萬千里。古代文明觀止矣。運會循環如逝水。鐵血交争譁變微。二十世紀新歴史。挽回頼有屠龍技。同文同種同宗旨。興亜進歩從此始。書劍遊游四百州。豪氣直壓元龍樓。春非我春秋非秋。風狂浪急呼同舟。困恥不雪誓不休。輔車唇齒吾侶儔。三韓笳鼓聲清適。知君豈作逍遙遊。^{四十一}

この詩に関して佐佐木信綱も「晁卿の昔を今をかたらへば筆とりて示す『風狂浪急呼同舟』（『遊清吟藻』に所収）という短歌を残した。

趙爾巽は、日本と中国とは「同文同種同宗旨」であり、「輔車唇齒吾侶儔」である。だからこそ、今西洋諸国と「鐵血交争」最中の中国のために、そして、「興亜進歩」をさせるために、「同舟」すべきだと念願していた。かつ、趙爾巽は晁卿のことを語った。晁卿は阿倍仲磨の中国名である。阿倍仲磨は十七歳の時に中国の唐に留学した。在唐五十四年の間に、李白、王維、儲光儀等の巨豪と交遊した。また、三朝に歴任して殊遇され、位人臣を極めて公爵の高きに登り、日本と唐の友好交流に大いに寄与した。^{四十二} 趙爾巽は阿部仲磨の話語り、佐佐木信綱の遊行に對して、「知君豈作逍遙遊」と述べた。これは「君はのんびりと遊行する気分はないと分かっている」という意味を指す。すなわち、趙爾巽の考えでは、佐佐木信綱がただ遊び気分で遊行し

てはいけない。千鈞一髮の緊急事態に面した現在、趙爾巽には佐佐木信綱に阿部仲麿のように日中友好の架け橋の役割を果たしてほしいという望みがあったのだろう。同時に、佐佐木信綱のような日本人と友好的に交際しようとしたところから、趙爾巽には日本側の協力を求めたいという「風狂浪急呼同舟」の気持ちがあったと考えられる。

趙爾巽を訪れる前に、佐佐木信綱は葉德輝を訪問した。ここで古典籍探求の好きな佐佐木信綱は葉德輝の蔵書を満喫した。「紫檀の板を上下にあてて紐でくぐった古典籍が実に美しく棚においてある。主人は自ら紐を解いて、美しい宋版の数部を見せてくれたことである。」^{四十三}そして『遊清吟藻』に次のような書齋の有様を詠んだ歌を作った。

苑舊りて臘梅の枝花まばらに書齋の書のうづだかく淨し

あるじは起居みややかなり香木の函ゆとて示す唐人の筆
杜甫の集ひらき示して聲低うかつ吟じかつ語らふ主人

葉德輝は大切にしていた唐時代の作品を佐佐木信綱に展示し、一緒に杜甫の詩歌を吟じ、語り合った。更に、葉德輝は佐佐木信綱に次のような詩を贈った。

遠西異俗通海里。中東古学式微笑。神山日照蓬萊水。詩人一鳴歌變徵。胸羅掌固窮歴史。體薄齋齋嗤小枝。性情所記

風騒旨。永嘉之未聞正始。九州之外有九州。南來飛過黃鶴樓。風塵瀕洞天地球。五湖難尋范蠡舟。高歌青眼君且休。屈宋不作誰與儔。洞庭木脫風力適。我今倦遊思臥遊。^{四十四}

葉德輝は基本的には思想保守な清末郷紳であるとはいえず、「九州之外有九州」^{四十五}ということを認識していた。すなわち、中国の上には中国より強い国があると考えた。ただ「五湖難尋范蠡舟」^{四十六}つまり中国の現在の情勢から見れば、范蠡のように大志を成し遂げたあと、悠々と遊行できる人はほとんどいないと述べた。「我今倦遊思臥遊」するしか出来ない。葉德輝は佐佐木信綱と対面して胸に潜んだ憂国の思いを晴らしたかったようである。佐佐木信綱が客として静かに耳を傾けたのだろう。

中国滞在中、佐佐木信綱が訪問したかったが訪問できなかった人物がいた。文廷式という詩人であった。この文廷式は案内役の白岩龍平とも野口寧斎とも友人であった。白岩龍平が上海に活躍する時、しばしば文廷式と一緒に食事したり遊覧したりした。そして、『白岩龍平日記』の中では、文廷式が一九〇〇年日本に亡命していたことを記載している。文廷式が東京に到着した二月十七日から、神戸へ発し、帰国しようとする四月五日までの四十八日中、白岩龍平は彼に手厚い世話をしてあげた。^{四十七}『白岩龍平日記』には文廷式に関連する箇所は二十一にも

及んでいる。およそ一日おきという高い頻度で、白岩龍平と文廷式とは親しく付き合っていたことが分かる。

文廷式と野口寧齋の交際に関しては、野口寧齋が死没後、白岩龍平が『新小説』に発表した「嗚呼野口君」という追悼文が詳しい。

清国湖南の傑物文廷式は故人寧齋君が海外に置ける唯一の親友であった。文廷式はこの来遊の際初めて野口君と知ったのであったが、これが意気の投合とでもいふのであらう、両者の間互いに其才藻と人格を推称して一見旧知の概ありだ、文氏が清国に帰ってから、常に互いの間にその書簡の往復の絶えなかつたのは寧齋君と内藤湖南君との二人であった。その野口君が文廷式の学と識とを推称した。^{四十八}

文廷式は一九〇〇年に訪日する際、野口寧齋と知り合った。帰国後も野口寧齋の唯一の海外友人として書簡のやり取りを続けた。佐佐木信綱が中国遊行を始めたのは一九〇三年からである。時間的に見れば、佐佐木信綱が漫遊しようとする時、野口寧齋と文廷式はすでに親しい関係を持っていた。

従って、恐らく白岩龍平と野口寧齋二人から文廷式の話を知ったため、佐佐木信綱は文廷式を訪問する気が出てきたのであろう。ところが、佐佐木信綱は「湖南の旅のはてなる湘潭の

小雨の街をだましつあゆむ」所を、「詩人文廷式にあいたいと思うたに、萍郷に往つて不在である。」^{四十九}ので、歌

遠々し江を溯りこの国の詩人、君に遭はまく来しを

まぢかしとふ桃源の水に筆そめ書く君が文の華のにはひは

もめやに

を残しただけで、文廷式には会えなかつたのであった。更に巡府も会见する日が迫つたので砲艇で下つたために、文廷式と出会う機会を逸した。佐佐木信綱は残念限りであつただろう。

佐佐木信綱の中国人との交際は、文献から明白になるのは趙爾巽、葉德輝、文廷式といった三人のみである。しかし、中国の演劇に対して、佐佐木信綱は「従来支那へ遊んだ人の日記などを見ますに、その演劇を評しては、合方の鳴物が喧しいばかりで、殆見るにたらぬと言つて居られるやうですが、私は決してさうは思ひませんので、却つて趣味あるものとして、之を感じました」^{五十}と記している。そのために、佐佐木信綱はしばしば各地の劇場に足を運んだ。そこで、様々な演出者と観客と出会つた。そして、白岩龍平が設けた家族忘年会を描いた「偕楽園の夜」^{五十一}から「龐さん」「潘さん」「西さん」「薛聯珊」といった中国人と楽しんでいたことがわかる。「やがて自動車で龐さんの奥さんと潘さん御夫婦が見えた」^{五十二}という。こういった中国人は

奥さんと潘さん御夫婦が見えた」という。こういった中国人は

上流社会に属する者である。要するに佐佐木信綱は船子を始めるとする下層労働者、趙爾巽のような官僚、葉德輝と文廷式のような文人、そして上流社会の人々を幅広く接したわけである。

六、おわりに

佐佐木信綱は「東亜の風雲があわただしいから早く歸るやうにとのこと、あわただしく蘇州杭州をめぐった。あわただしくはあつたが、古い文化のくさぐさを満喫して、一月の末に日本に歸った」^{五十三}。そして、佐佐木信綱は中国漫遊の旅を次のような歌で締めくくった。

国土をひろみゆたけみげにまこと「眠れる獅子」を忘れて
思へや

手とりかはし笑みて談らなこの国の遠つ聖に多く学びき

佐佐木信綱は中国五千年の歴史や文化の重みを肌で感じ、「おおく学びき」と痛感したのである。しかし、後年に書き綴った『ある老歌人の思ひ出』に「手とりかはし笑みて談らなこの国の遠つひじりに多く学びき」はこれ亦歌人の夢であった^{五十四}と記した。中国を漫遊して「多く学びき」よき思い出は、ただ明治三十七、八年だけの幸福な出来事であった。結局日露戦争とア

ジア太平洋戦争のために、幸せは長く続かず夢と帰したのである。

佐佐木信綱が中国を漫遊した全容を明らかにすることによって、次のようなことが分かる。佐佐木信綱は中国に憧れ、漫遊を通して、中国の歴史と文化の重みを実感し、満足できた。そして、漫遊中に切実に中国のことを見極め、平明直叙に『遊清吟藻』に反映した。更に、様々な中国人と接し、作品にし、中国人に親しみ、同情の情を抱いていった。時局で早めに帰国せざるを得なかったが、佐佐木信綱は実に中国との友好的交流と平和を切願していたのではないかと思われる。

一 明治二十三年十月父と共に編纂刊行し始めた。明治二十四年六月父が亡くなり、その遺業を継いで、十二月全十二冊を刊行完結した。一八九〇年―一八九一年、博文館。

二 『心の花』は竹柏会の機関紙である。明治二十九年の十月から刊行した『いさ々川』が前身である。『いさ々川』が停刊後、明治三十一年二月、佐佐木信綱を中心に、石樽辻五郎（千亦）編集、井原豊作発行で創刊された。「心の華」、「この花」等と表記されたこともあった。誌名の由来は、創刊号の信綱の「歌はやがて人の心の花なり」による。なお信綱

をとりまく歌人の集団としての竹柏会は、その翌年に第一回大会を開いている。

三 佐佐木信綱『作家八十二年』（昭和三十四年五月二十五日、毎日新聞社）を参照。

四 中村義「長沙開港前後と日本人——竜蔵、信綱、梅暁、公望」歴史学会編『史潮』平成九年五月二十日、新四十一号、二〇一頁。

五 石崎等「中国大陸へのイメージ——竹添井井から佐々木信綱へ」『立教大学日本文学』平成十三年七月二十五日、第八号、六一〜七一頁。

六 前掲「長沙開港前後と日本人——竜蔵、信綱、梅暁、公望」四頁。

七 前掲「中国大陸へのイメージ——竹添井井から佐々木信綱へ」七〇頁。

八 佐佐木信綱『ある老歌人の思ひ出』（昭和二十八年十月二十五日、朝日新聞社）二四三頁。

九 東亜同文会編『統対支回顧録下』（昭和四十八年八月二十五日、原書房）を参照。

十 前掲『ある老歌人の思ひ出』二四三頁。

十一 前掲『ある老人の思ひ出』一三六頁。

十二 同上。

十三 前川佐美雄「歌集『おもひ草』について」『心の花』昭和三十九年四月一日、第六十八巻第四号、佐佐木信綱追悼号、一四〇頁。

十四 佐佐木信綱「南清漫遊談」竹柏会編『心の花』明治三十七年四月一日、第八巻第一号、六七頁。

十五 前掲『ある老人の思ひ出』二四四頁。

十六 佐佐木信綱「南清漫遊談」竹柏会編『心の花』明治三十七年四月一日、第八巻第一号、六五頁。

十七 前掲『ある老歌人の思ひ出』六九頁

十八 『おもひ草』に所収。明治二十八年二月、日清戦争直後の歌である。初出は不詳。まだ数え年二十四歳の時作った歌である。

十九 窪田空穂「佐々木信綱博士の功績を仰ぐ」『短歌』昭和三年二月一日、第十一巻二月号、一頁〜三頁。

二十 依田学海「遊清吟藻序」竹柏会編『心の花』明治三十七年四月一日、第八巻第一号、四三頁。

二十一 愚園は現在の豫園を指し示すと思われる。

二十二 金玉均（一八五〇〜一八九四）朝鮮李王朝末期の政治家。若年から開化思想を抱き、日本に遊学した。日本の明治

維新を模範とし、清からの独立、朝鮮の近代化に取り組んだ。明治十七年日本公使の協力を得て閔氏政権打倒の甲申事変を起こした。清の介入で失敗した後、日本に亡命した。のち上海に渡って暗殺された。古筠記念会編『金玉均伝』（昭和十九年五月三十日、慶應出版社）を参照。

二十三 前掲『佐佐木信綱歌集』六二頁。

二十四 前掲『ある老人の思ひ出』一九七頁。

二十五 前掲『ある老人の思ひ出』一九九頁。

二十六 『近代作家追悼文集第二卷』（昭和六十二年一月二十五日、ゆまに書房）一一四頁。

二十七 佐佐木信綱「慨世吟」『帝國文学』明治三十八年三月十日、第十一卷第四号、二七五頁。

二十八 前掲「慨世吟」二七九頁。

二十九 中野逍遙（一八六七〜一八九四）、明治漢學者。佐佐木信綱は『作家八十二年』に「明治二十七年十一月 親友逍遙中野重太郎君が世を去った。君はこの秋、帝大漢文科を第一回に卒業、宮本正貫と共に東洋史を編みつつあった。一方

多情多感の詩人で、その熾烈の情は血と涙とを以て綴つたといふべき多くの詩を世に遺した。君は狂骨、自分は残月と号したので、自分は狂残銷魂録を二十五年十月の城南評論に掲

げもした。その学ぶ所は異なっておるが、生涯の親友である先輩の永眠は嘆かわしさに堪えなかつた。」と記した。佐佐木信綱が南清漫遊する時は、ちょうど中野逍遙が亡くなつた十年目であつた。

三十 范仲淹、中国北宋の政治家、學者。宋慶曆四年、范仲淹は鄧州（河南省）に左遷された時、岳陽樓を修復した滕宗諒の囑託に応じて慶曆六年九月十五日に「岳陽樓記」を作つた。末尾の「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」一句が周知されている。

三十一 范能濬編『范仲淹全集』（平成十六年十一月、鳳凰出版社）一六八頁

三十二 佐佐木信綱「洞庭湖」前掲『佐佐木信綱文集』に所収。

四一三頁〜四一四頁。

三十三 前掲「南清漫遊談」六八頁。

三十四 苦力、旧時、単純肉体重労働に従事する人夫。愛知大學中日大辞典編纂所「中日大辞典増訂第二版」（昭和六十二年二月一日、大修館書店）一〇四五頁

三十五 前掲「大陸のイメージ——竹添井井から佐々木信綱へ」六八、六九頁。

三十六 佐佐木信綱「心の花第九卷卷頭の辭」『心の花』明治

三十八年一月一日、第九卷第一号、一頁。

三十七 『佐佐木信綱文集』（昭和三十一年一月十五日、竹柏会）五十九頁。

三十八 根津同文書院院長は根津一のことを指す。根津一（一八六〇〜一九二七）、山梨県の名家に生まれ。陸軍大学校にはいり、砲兵中尉に進む。明治二十年参謀本部出仕になり、本部队長の中国攻略論を見、初めて中国を改善して露国に対抗しようとする志を抱くに至った。翌年、荒尾精と一緒に上海に日清貿易研究所を設立し、その経営に当たった。明治三十一年近衛篤磨を中心とする東亜同文会に入社した。後院長に就任し、同文会の拡大事業に大きく寄与した。東亜同文会編『対支回顧録下巻』（昭和四十三年六月二十日、原書房）を参照。

三十九 趙爾巽（一八四四〜一九二七）、中国清朝同治時期の進士で、湖南、湖北、貴州の知府、安徽省、山西省の按察使、布政治使を歴任。一九〇二年湖南巡撫に転任した。外国侵略者から採鉱権を取られないように努力し、教育改革を唱導し、長沙にあらゆる書院を新式学堂に改めた。後、湖広総督、四川総督などを務めた。葉德輝（一八六四〜一九二七）、中国清朝湖南省湘潭出身。文字版本学家。しばらく吏部に勤務し

てから、帰郷。書籍を愛好し、藏書楼「観古堂」を持つ。傳増湘と並び、「北傳南葉」と言われる。思想保守で維新変法に反対し、袁世凱の復辟君主制に賛成し、一九二七年湖南民衆に悪徳の地主として処死された。『アジア歴史事典』（昭和三十五年十二月十三日、平凡社）を参照。

四十 前掲『ある老人の思ひ出』、二四五頁。

四十一 『心の花』明治三十七年四月一日、第八卷第一号、四四頁。後、『作歌八十二年』に収録された。

四十二 長野勲著『阿部仲磨と其時代』（昭和八年五月二十五日、建設社）を参照。

四十三 前掲『ある老歌人の思ひ出』七八頁。

四十四 葉德輝「思草題詞」「心の花」明治三十七年四月一日、第八卷第一号、四四頁。

四十五 九州は中国のことを指す。

四十六 范蠡、中国古代春秋時代の人である。越王句踐を二十年間補佐し、敵の呉国を打ち倒した。越を天下の覇者とさせた後、引退し、西施という女性を連れて舟で斉国を遊びまわったという。

四十七 中村義『白岩龍平日記』（平成十一年九月三十日、研文出版）三五八頁〜三五五頁。

四十八 白岩龍平「嗚呼野口君」『新小説』明治三十八年七月

一日、第十卷第七号、一九五頁。

四十九 前掲『作歌八十二年』、八三頁。

五十 佐佐木信綱「南清の演劇」『新小説』明治三十七年三月

一日、第九卷第三号、二〇九頁。

五十一 佐佐木信綱「借楽園の夜」『心の花』大正六年二月一日、

第二一卷第二号、五四頁。

五十二 同上。

五十三 前掲『ある老歌人の思ひ出』二四六頁。

五十四 前掲『ある老歌人の思ひ出』二四七頁。

(すう そうそつ／本学大学院生)